



企画展

夏と秋の美学

鈴木其一と伊年印の優品とともに



Museum Collection Exhibition
The Aesthetics of Summer and Autumn:
Masterpieces by Suzuki Kiitsu and the Inen Seal Painter

『古今和歌集』において、四季のうち春と秋の歌が、夏と冬の歌を数で大きく上回ることも示されるように、日本では古来、春と秋が好まれました。穏やかな気候もさることながら、四季のサイクルのなかで、生命の息吹あるいはその逆の衰微をしみじみと感じさせるのが、この二つの季節が愛される大きな理由です。春と秋に対する偏愛は、季節が離れた桜と紅葉を取り合わせる作品をはじめ、美術の世界でも見出されます。

そうした伝統を受け継ぎながら、江戸時代の美術には、春ではなく夏と秋の組み合わせも目立ってきます。江戸琳派の異才・鈴木其一の「夏秋溪流図屏風」はなかでも印象的な作例ですが、そのルーツは、琳派の祖である俵屋宗達が主宰した工房のトレードマークである「伊年」印が捺された「夏秋草図屏風」に遡ります。その背景に、夏の風情を好ましく思う感性があったのは間違いありません。また、旺盛な夏と衰えゆく秋を連続して描くことは、季節の推移をくっきりと切り取るのにも寄与したはずで

本展は、鈴木其一と宗達工房の優品を中心に据えつつ、美術作品によって初夏から晩秋まで移ろう季節の情趣をお楽しみいただきながら、そこにかがわれる美意識の諸相に迫るものです。

2024年 **9月14日(土) ~ 10月20日(日)** 日時指定予約制
根津美術館 NEZU MUSEUM <https://www.nezu-muse.or.jp>



展示室1・2 夏と秋の美学 –鈴木其一と伊年印の優品とともに–



なつあきくさびょうぶ 伊年印
夏秋草図屏風
6曲1双 紙本着色
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵



墨を多用して表された夏から秋にかけての草花が、霞や地面でつなぎ合わされ、穏やかな韻律を刻む。夏景に咲き乱れる山百合と鉄砲百合がこれまでになく、新鮮である。画風から、俵屋宗達の2世代後の後継者である喜多川相説（生没年不詳）周辺で制作されたとみられる。



重要文化財
なつあきけいりゅうびょうぶ
夏秋溪流図屏風
すずき かしつ
鈴木其一筆
6曲1双 紙本金地着色
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵



溪流が流れる檜の林。右隻は白い山百合の咲く夏、左隻は桜の葉が赤く色づく秋である。左右で地面の緑にわずかに濃淡差をつける繊細な感覚の一方、ねっとりした溪流の表現や右隻の檜に真横向きにとまる蝉など異様な描写が充満する。鈴木其一（1796～1858）の代表作。



ほととぎす
時鳥図
れいせい ためたか
冷泉為恭筆
1幅 紙本墨画
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵
植村和堂氏寄贈

徳大寺実定の歌「ほととぎす鳴きつる方を眺むれば ただ有明の月ぞ残れる」（『千載和歌集』）を、「ほととぎすなきつるかたを」の文字をはさみ、月とそれを眺める公卿を描いて表す。時鳥は夏の到来を知らせるモチーフ。冷泉為恭（1823～64）は、復古大和絵派の絵師。



ふなあそび もみじがり
舟遊・紅葉狩図
すみよしひろさだ
住吉広定筆
2幅 絹本着色
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵

夏に公家の女性たちが舟遊びで涼をとる右幅に対し、左幅は男性貴族たちによる秋の紅葉狩りを描く。広々とした池庭と崖を落ちる滝という対比も見える。筆者の住吉広定（1793～1863）は江戸時代のやまと絵の流派である住吉派の7代目。



なつくさず びょうぶ
夏草図屏風
おかたごろうん
尾形光琳筆
2曲1双 紙本金地着色
日本・江戸時代 18世紀
根津美術館蔵

晩春から夏にかけての30種近い草花が、2曲1双を通じ、対角線を描くように配される。尾形光琳（1658～1716）が好んで描いた紅白の立葵が構図の中心であるが、近衛家熙の植物写生「花木真写」に登場する草花が多いことも指摘される。

ていかえいじゅうに かげつ わか かちようず くかつ
定家詠十二月和歌花鳥図 九月
おかたけんざん
尾形乾山筆
1幅 紙本着色
日本・江戸時代 寛保3年（1743）
根津美術館蔵



藤原定家が十二月の花と鳥を詠んだ和歌にもとづく本来12枚セットの色紙のうち九月の図。薄に潜む鶉の様子を素朴な筆致で描き、周囲の余白を埋め尽くすように和歌を書く。陶芸家の尾形乾山（1663～1743）は晩年、書画にいとそしんだ。

同時開催

展示室5 やきものに見る白の彩り

土器を使っていた人々が白い器物を初めて見た時、その清々しさに魅了されたに違いありません。時に彩りさえ感じさせてくれる「白」をご覧ください。



はくじょうさぎみみつぼ
白磁兔耳壺
中国・唐時代 8世紀
根津美術館蔵
藤崎隆三氏寄贈

肩の左右に兎の姿をした耳が付く壺は、灰白色の胎土に白土を塗って白くし、これに透明釉をかけている。柔らかな黄色みのある白い壺である。

展示室6 名残の茶

一年間楽しんだ前年の茶葉や、初夏より慣れ親しんだ風炉は10月で使い納め。その名残を惜しみ、この時期は寂びた茶道具を取り合わせます。



かき へたちやわん たきがわ
柿の蒂茶碗 銘 瀧川
朝鮮・朝鮮時代 16世紀
根津美術館蔵

「柿の蒂」とは茶碗を伏せた姿や色調が柿の蒂に似ていることによる。本作は、割れて繕われた姿を、分かれても合流する急流にたとえ「瀧川」の銘がつけられた。

関連プログラム

スライド
レクチャー 9月20日(金)、10月4日(金) 各日とも11時30分～12時15分
会場 / 根津美術館 地下1階 講堂
企画展「夏と秋の美学」の担当学芸員がスライドで解説します。
※当館ホームページからお申し込みください。いずれも入館料が必要です。

開催概要

展覧会名 企画展「夏と秋の美学 – 鈴木其一と伊年印の優品とともに –」

日時指定予約制

スムーズなご入館と快適な鑑賞のために、当館ホームページで日時指定入館券をご購入ください。(招待はがき等をお持ちで入館料無料の方もご予約ください。)

主催 根津美術館

開催期間 2024年9月14日[土]～10月20日[日]

開館時間 午前10時～午後5時(入館は閉館30分前まで)

休館日 毎週月曜日

※ただし、9月16日[月・祝]、23日[月・振替休]、10月14日[月・祝]は開館、それぞれ翌火曜日休館

入館料 オンライン日時指定予約 一般 1300円(1100円) 学生 1000円(800円)

- ・()内は障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。
- ・当日券(一般1400円、学生1100円)も販売しております。
(ご予約の方を優先してご案内いたします。当日券の方はお待ちいただくことがあります。
混雑状況によっては当日券を販売しないことがあります。)
- ・2024年9月10日[火]より当館ホームページで予約を受け付けます。
- ・ご予約は1グループ10名までとさせていただきます。

アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、
B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分

住所 〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1

お問合せ Tel. 03-3400-2536(代表)
website <https://www.nezu-muse.or.jp>

広報・取材の
お問合せ 学芸部 広報課 所/村岡
Tel. 03-3400-2538(直通) e-mail: press@nezu-muse.or.jp

当館の広報制作物に関して、郵送からメール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館 広報課へ
どうぞお知らせください。(press@nezu-muse.or.jp)

次回展 特別展「ひやくそうまき えくすりたん す百草蒔絵薬箆筒といいづかどうよう飯塚桃葉」

2024年11月2日[土]～12月8日[日]

はちすか徳島藩主・蜂須賀家に伝来した「百草蒔絵薬箆筒」について、博物学を手がかりに制作背景を読み解き、
その作者・飯塚桃葉(初代)にも迫ります。



左:重要文化財 百草蒔絵薬箆筒 飯塚桃葉(初代)作 日本・江戸時代 明和8年(1771)
右:同上(蓋裏・部分)
根津美術館蔵

*本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課へお問い合わせください。(2024.6)